國木田獨步作品集

第三卷

國木田獨歩作品集

第三卷

創元社

國木田獨歩作品集　第三卷

定價　二八〇圓

著者　國木田獨歩

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四

發行者　小林茂

東京都文京區久堅町一〇八

印刷者　大橋芳雄

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
（大阪市北區樋上町四五）

發行所　株式會社　創元社

電話茅場町（66）二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

昭和二十六年十一月十日　初版印刷
昭和二十六年十一月十五日　初版發行

共同印刷・鈴木製本

萬一落丁亂丁がありましたら取替へます

第一部　敗　北……二
第二部　佐伯における教師生活……一六七
第三部　日清戰爭從軍……二五八
第四部　佐々城信子との戀愛……三〇一
第五部　破　綻……三五二
解　説（福田恆存）……四三三

（註）本册を五部に分けたのは、讀者の便宜のために編輯せるものにして、勿論、原文にはなきものなり。

欺かざるの記（抄）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第一

自明治廿六年二月四日
至同　年六月卅日

二月

▽明治二十六年の一月も飛ぶが如くに去れり。回顧して思ふに、果して悲しむ可き乎。吾の決して喜ぶ能はざるは明らか也。然れども果して悲しむ可き乎。吾れは悲しみたり、何となれば事多くは心と差がひたれば也。然れども亦た此の一ケ月の吾に敎ゆる所決して少なからざりしを思へば、慰むる所なきにしもあらず。

▽二月三日は吾に取りて極めて大なる謎語なりしを記憶し置かん。早朝吾は宿を立ち出でたり。其は轉宿の意切なりしかば、麴町區に其の恰好の宿所を搜索せん爲めなり。吾は成る可く下等の宿所を欲したり、何となれば切りに自ら思へらく、故鄉の父母吾の爲めに其の酒を節し、其の費を縮めて吾に送るに當り、吾其の旅宿を撰んで卑汚賤食に甘ずる能はざるは、心術の卑汚薄弱なるを感じたる其の一なり。又た自ら思ふ、吾は終に世に好遇せらるゝの人に非ず、而も奮て理想の事業に當らんと欲せば、の決心なかる可からざるを信じ、之れが決心を固ふするには平生の用意修養の大切なるを知りたればなり、之れ其の二。又た自ら計るに、少しにても儉約を積んで多少餘裕を造り敎會に對する義務を全うし、必要の書籍を購讀せんと欲したればなり、之れ其の三。求めて其の家を得ざりき。而て吾は意を蹴して轉居の期を延すに決心したり。其は一つは自由社入社一件の成否定まりて後にする方の利を思ひ、一は「青年文學」十六號の編輯を終りて後にすべきは、「青年文學」に對する事務上の義務なりと信じたればなり。路を轉じて今井兄を訪ひ、數分の談話を試みたり。[3]丁吉治氏の宅に立寄る。謎語は來れり。丁氏吾に自由社長金森通倫氏の意を通ず。金森の意は其の黨の爲めに盡すよりすれば應に然る可き思付きなりしなり。

曰く自由黨に新聞事業の發達し居らぬは極めて不用意千萬なるをもて、行く〳〵は大に之れが擴張に盡さんと欲す。曰く、かるが故に新に入社せんと欲する者は、決して一時のやりくりたるを許さず、已に入社したる以上は此末全く身を新聞事業に投じ、又た自由黨の爲めに盡す

の覺悟なかる可からず。故に丁氏は吾に問ふに、果して此條件を以てするも入社を望む乎。と、斷乎たる決心を促ながしぬ。兎も角も決心せり。『以て入社す可し』と、何に故に。

吾は吾に問ふ、第一、爾は職業を新聞事業と定むるの決心ある乎。と、吾は色々に苦心せり、樣々に考へたり。「職業」「職業」此の文字は今更らの如く其の解釋を吾に求めたり。然れども終に吾が最初の信仰（最初の信仰とは平生の信仰の意なり）は最後の答なりき。『人間は職業の如何に由て其の價値を定むる者に非ず、北海の漁夫を見ずや、山間の樵夫を見ずや、神の眼は平等至公なり』と、之れ第一思想なり。而して、吾が教育、吾が境遇、吾が技倆、吾が志望（の幾分）は吾が新聞事業を否とするの理由を與へざりし也。吾は今更らの如く、決心せり。『吾は新聞記者の職につくを適當なりと信ず』と。

吾は已に此の答を得たり、他は元より易々たりし也。自由黨の爲めに盡すの決心ある乎てふ第二の問は鐵斧の靑竹を破るが如くに、痛切に明確に、即座に決答せられぬ。曰く『自由黨が其の天職を忘れざる以上は、自由黨が其の精神を殺ろさざる以上は、吾は元より心血を盡し、熱涙を傾けて其の隆盛の爲めに盡す處ある可し』と。人間感情の變轉も不思議なる者なる哉。かく決心し、かく確信し來るや、吾の思想は急轉激揚して百尺竿頭更らに一歩を進むるの看ありき。自ら思へり、眉を揚げ、膽を張て思へり、自由黨の天職は吾が國政の大革新に在り、自由黨の精神は自由平等に在り。已に然り、之れ自由黨なり。若し或は自由黨にして此の天職を怠り、此の精神を失はん乎、之れ黨員の腐敗のみ、黨員の墮落のみ、吾は寧ろ其黨員を改む可し。其の黨員を責む可し。之れ自由黨の精神を活かして其の肉を破くなり。又た、丈夫腕を振ふに足るの事業にあらずとせんやと、ア、急々化々、想像は想像を追ひ、空想は空想を生めり。心靈鬱あり、停止せよと。暗愁は襲來せり、妄想は破れぬ。勇ましき決心は何時の間にや、重荷の如く吾が心靈を壓せり。壓せられ乍らも又た其の決心を醒す能はず。只だ暗愁は慘憺の色を帶びて吾を朦朧たる不安の室に導きぬ。此夜深更、將に、三時に垂んたる時、孤燈の下に紙をのべて書て曰く、

『幽に悲みて、强く樂しみ、固く行ひ、休まず勉め、徐かに急ぎ以て天命を終らんか。靈の人なり、義の人なり、而して成効の人なり、明日を計る可からず。吾は生く可き乎、須からく永久に生く可し。』

明朝は早々、丁吉治氏を訪ふ可し、決心を語る可しとて、鷄鳴の曉近きを報ずる時、孤枕を抱て寒夢に入りぬ。ア

ア謎語果して解かれたる乎、吾之れを知らず、乞ふ一年の後を見よ、十年の後を見よ、百年の後を見よ。ア、後悔を以て解かる可き乎、血涙を以て解かるべきか、安心を以て解かるべき乎。神は知るも吾は知ること能はず、然れども吾は信ず、神は自から解く者の爲めに解き、自ら助くる者の爲めに助くるを。

1 「青年文學」二十四年十一月創刊。五號迄は共會、以後は共社より發行。民友社同人及びその親近者の編輯に係はる月刊文學雜誌。

2 今井忠治。山口中學以來の親友。獨歩作「暴風」の主人公。

3 丁吉治。民友社同人、「自由」の外報專任。二十一年早稻田の英語本科卒業。池本姓を名乘りしことあり。

4 金森通倫。當時自由社長。熊本英學校二期生。後、同志社に學ぶ。森峰の胡感。異色あるキリスト教徒。

四日、土曜日。夜祈禱會に出席す。此の夜は吾も祈禱する所あらんとて出席したり。植村正久氏の感話あり、重に共勵會の事なり。此頃教會奮興の氣運少しく起り、殊に植村氏は大に熱する所あるが如し。吾も亦私かに教會に盡すあらんと決心して一月三十日の夜は植村、多田素の兩氏を訪ひ、色々と感ずる所を陳述し、意見のある所を尋ねたり。吾が教會に對する唯一の希望は乃ち教會員の懇情を盛にするに在り。吾は其爲めに教會の分治法を編出し植村、多田兩氏にもたゞしたり、兩氏とも賛成なり、只だ其の實行の如何を危ぶめり。さて植村氏の感話は終り、多田氏は續て云ふ、諸君將に教會奮興の事に付て感ずる所あらば今夜の如き、懇談すべきの好期ゆゑ、敢て隔てなく語り出でられよ、と。二三の人々は語り、或人は祈れり。而して吾は一語を漏す能はず、一句を祈る能はずして了はれり。吾は大に反省する所ありたり。吾の性情特癖を更むるなくんば、吾は終に自ら企てたる事の實行者たる能はざることを深く感じたり。吾は今日より此の點に付ては大に修養練磨する所なかる可からずと信じぬ。

吾は將に自ら計畫企圖する以上は、之れを實行するに十分の勇氣と自信と用意と、誠意と熱心の欠く可からざるを知りたり。

若し然かする能はずんば吾は終に自ら熱するも人を温むる能はず、自ら企てゝ自ら實行する能はざる不成功無責任の人として終る可きを懼れたり。

1 植村正久。英國教牧師。安政四年江戸旗本の家に生る。一番町教會（富士見町教會）を牧す。「福音新報」「日本評論」を主宰。大正十四年逝去。六十九歳。

五日、日曜日。午後、委員會に傍聽す。委員會に向て言はんと欲する事を考へ行き乍ら、機を得る能はずして言はず止みぬ。機を得ざるに非ず。自ら直截ならず、勇氣に乏く、機を捉ふる能ざりしなり。

▽教會の運動は歩武を確かにし、漸を以てすべしと決心せり。之れ精密なる用意と、拔くべからざる自信とを得ん爲めなり。果して能く成功するや否や、記して後日を期せん。

六日、七日、八日、九日。四個の二十四時間は經過せり。吾に重要の時日にでありし乎、吾之れを知らず、後日を以て判斷するの外なければなり。然りと雖も吾は一時間たりとも重要ならぬ時間を此の短生命の中に有する能はざるなり、吾は五十年に足るか足らぬ乎の月日を此の茫たる宇宙、此の溷たる社會に宿す、其の理想に由て事を成さんと欲す、決して一時たりとも無意味に費す能はざる筈也。思ふに此の四日間、吾には必ずや意味なかる可からず。

國木田哲夫と稱する一個の青年は、日本國と稱する國に、天の下に地の上に、明治二十六年二月六日、七日、八日、九日を如何に費せしか。渠の生命は夢なりしか、四日間の生命は何を意味するか、渠は如何に宇宙に繫がりしか、如何に社會に繫がりし乎、如何に歴史に繫がりし乎。

▽六日の朝、渠は金森通倫氏を訪へり。自由社に入社するに就て、金森に直接の談判を試みんと欲せし也。金森は不在なりし、金森は外泊したる也、渠そを知らざりし也。

▽六、七日、八日、九日の四日間の事を記さんとて筆執りしも前章を以て止め、九日の夜は眠に入れり、今は十日の半夜なり。

▽事實の詳細なる點は必ずしも記臆せず、只だ筆にまかせて、此の一個の青年が過ぐる五日間に於ける事實の大要、思想の根本、感情の焰、いさゝか左に記し置かん。

△明日を以て愈々轉居するに決心せり、「青年文學」大半かたづき、自由社入社も今の分にては何時の事か知れざればなり。然らば何故に急ぐか、曰く靜思默讀の場所を得んが爲なり。

△七日は午前外出、金森氏を訪はんとて路に丁吉治氏に立寄る、丁の云ふ、已に遲し、今より行くも金森或は外出後ならん、吾由て止む。

△八日の午後今井氏と上野公園を散策し大に談論す、自戒となり、奬勵となり、懺悔となる。

△九日、早朝金森氏を麻布の宅に訪ふ、家に病人ありて取り込み中ゆゑ面會する能はずとて謝絶す。

△同日、午後早々京橋印刷會社に行く、「青年文學」の印刷を依頼せんが爲めなり。約成りて歸る。歸宅後直ちに多田素氏を訪ふ、不在。夜、京橋印刷會社林某來り談判破れ、直ちに水谷氏と神田の東京印刷所とか稱する印刷屋に行いて依頼す、謝絶せらる。熊田活版所

に至り約成る。

△十日、午前熊田活版所來り約破る、午後京橋自由新聞社に行く、丁吉治氏及金森通倫氏に遇はんとてなり、詔勅下り新聞屋多忙、丁不在、止むを得ず歸宅す。

午後、西村[1]もと氏に依頼して質屋に衣類を典し五圓を得、之れ明日の轉居に充る爲めなり。

▽然れども之れ只だ表面に浮べる、極めて粗雜なる事實のみ。

此の五日間に一個の青年は如何なる周圍と、如何なる思想感情に取りまかれしか。

▽七日は則ち議會と内閣が大衝突の結果なる十五日の休會終へて再び開會し、彈劾的上奏案を通過し、自ら休會したるの日なり。

▽十日（則ち今日）は、天皇より内閣大臣及び帝國議員に詔勅の下りし日也。

政界の雲行夫れ此の如く急なり、而して吾は一本の指すら此の大歴史の上に染むる能はず、否吾自ら歴史外に立てる心地せられたり、時は此等の大事實を只だ吾が眼前をかすめて過去に送りやりぬ、吾は默々としてそを見送るのみ。

▽社會生活の門は吾が爲めに開くが如くして開かず、吾を非運の戲に供せんとす。吾には理想と希望の火焰々として燃ゆる也、而も社會生活の門番は吾を弄す。吾は思へらく、吾に今少し自省の修養なき時は、吾は天を恨みざるも、人を咎めざるも、必ず社會を憤恨せしなるべしと、何となれば渠は社會の極めて不公平、亂雜、腐敗、僞善なるを、知ればなり。

▽吾が上におごそかなる天の淵、深く且つ遠し。吾の過去には吾の過去住ひ、吾の未來には吾の希望住む。吾が父母は其の天地間の餘命を吾が行末の爲めに困苦す。吾の信仰理想は吾を結びて宇宙の大精神に繫ぎ、吾の生活の必要は吾の前に社會の不調、亂雜の幕を揭ぐ。我が政事上の大變亂は新聞紙號外となりて、吾が机上に飛び來る。吾が書架にはエメルソン、カーライル、ユーゴー、聖書、ウオーヴウオルス、バーンス、ゲーテ、論語、王陽明、莊子、英國史、列を連ねて吾を瞰下す。

▽睡魔襲擊、筆を投じて止まん……。

1　西村もと。神田區猿樂町二丁目五番地に在る下宿屋。キリスト教徒。友人水谷眞熊、中村石郎等止宿す。「青年文學」の發行所となりしこともあり。

十一日。吾は麴町區五番町十八番地堀コト方に轉居せり、井田は八圓五十錢、堀は六圓八十錢なり。渠は九段を荷車の後に隨いて上れり。

此の夜は暗澹たる夜なりき、天雲澹々、風蕭颯、寒氣の

甚だしき事此頃にもめずらしかりき。

十二日。不幸なる渠！

渠は天地何となく寂寞たるを感ぜり、渠は如何に繫がり居るかを自ら知る能はず、渠は自ら哀れむ可き青年を小說中に見出す如く、己れを此の天地の間に、此の社會の裡に見出すなり、渠は其の不快なる念を去る能はず。然れども見よ、渠は必ず奮然たる可し、渠は神を愛す、今の天氣は渠を毒殺するに似たり。

渠は悲しき書狀を父母に送れり、社會生活の荒らき風浪は、渠をして此の悲しき書狀を書かしめたり。

△寒雲天に塞がりて薄暮もの寂びしく、吾心憂ひて樂しからざる時、丁吉治氏來る。快談時の移るを忘れ、心の曇り一掃し盡せり。

十三日。早朝金森通倫氏を訪ふ、在り、入社の事を語る。渠れ、吾をして即席に文章を作らしむ、吾れ應じて三四文を作りて歸宅す、午後直ちに引頭百太、水谷眞熊を訪ふ、夜十時歸る、歸路仰ぎて天を視る、天空の蒼々たるを感じ、列星の燦然たるを嘆ず、二個の自誡を得たり。左に、

△凡そ至誠と云ひ、寬容と云ひ、理想の實行と云ひ、正を蹈んで恐れずと言ふ、言ふは易きも行ふ者果して幾人ぞ。吾思ふ、かゝる大精神を實行に見る、微々たる修練の能くす可きにあらず、すべからく聖賢の書に對して高遠幽深の大思想、大感情を味ひ、別に天地、遑々離離たる人間の居に非らざる境界を知らざる可からず。

△凡そ克己修養は其の用意漫然たる可からず、必ず着着、一より二、三より四、蓋ふて到り、修めて達するの覺悟たかる可からず。吾に幾多の欠點あらんか、又幾多の過失あらんか、宜しく、先づ其の最たる者、易なる者より次第に之れ除くを努む可きなり。

乃ち吾は先づ直截を學ぶ可きなり。之れ皆て、德富氏が吾れに戒めたるの誡なり。吾今にして其の氏が吾を見るの明に服す、吾は實に直截ならざるなり、故に思ふ所、信ずる所、之れ容易に人に語る、人と論ずる能はず、爲めに折角の考案も實行を見る能はざりし事少しとせず、且つ人をして餘儀なくも隔意あらしむるに至る。

實は吾自ら今日迄直截なるを自任したるなり、蓋し其の然らざりしを悟りたり。

吾、今日迄で直截なりと思ひしは、之れ一個の意地我慢の發して他を他とも思はざりし也。

直截なる者決して然からず、思ふに左の資格を有するなくんば決して直截たる能はざるなり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第一、自信。自ら信ずる所、確乎たるあらば、口、何を憚て言ふ可からざらん。
第二、胆勇。眼中、信仰あるのみ、理想あるのみ、目的あるのみ、正義、至誠あるのみ、何ぞ斷々乎、已れの赤心を他の腹中に置く能はざるの理あらんや。
第三、淡白。自ら怪しき我意を作り、之れに閉ぢ籠りて他を疑ひ、好んで沈黙を固守するは決して淡白の人に非ず、斷じて直截を望むべからず。
直截なると、否らざるとは人物をして殆んど亂高下せしむ。直截なる人、必ず成功の人なり、德望の人なり、敬愛せらるゝの人なり。然れども吾は直截を修養するに、必ず一方に忘る可からざるの資格を要するを注意せざる可からず。
第一企圖、發言を輕々しくせず、之れ直截の變じて輕忽に陷るを懼るればなり。
第二企圖、發言せし事は必ず進んで責任を負ふ可き事。吾は直截を學ぶ可きなり、輕忽を懼る可きなり。

1 引頭百太。水谷眞熊。共に早稻田以來の友。引頭は二十四年邦語政治科卒。水谷はキリスト教徒。兩者共に「青年文學」の同人。九州の出身。

十四日。吾は斷乎として言ふ可し、「吾」と「吾が周圍に起り來る境遇」、吾が「前程に涌き來る事務、係累、連繫」とに就て必ず根底機微の變化動搖を看破深察せざる可からず、然らざれば吾が命運の冥々の中に決し行くを心付かざる可く、吾が理想、眞正の希望の暗々の裡に破滅し去るを知らざるに至る事明白なり。
今日吾に如何なる連繫の來り纏はりしか、其の爲め吾に如何なる喜悅と如何なる恐懼とを與へしか。

* * * *

十四日。右の一條を記し了はりて筆を擱めたり、今は十六日の朝なり、またたく間に二日を經過し去りぬ。

* * * *

今は十六日午後二時前となりぬ。上野圖書館より歸り來りて今机に向つて靜かに筆を下すなり。過ぐる二日は吾に取りては重要の時間と言はざる可からず、吾が此の天地の間に來りたる誕生日と共に記憶し置く可きの日なりとす。十四日を以て吾愈々自由社に入る事に決しぬ。十六日始めて自由社に出づ、社會生活の事務、始めて吾が前に置かれたり。
多くの心配は襲來せり、諸の悶着は掩來せり、雜多の事實は經驗されたり。
十四日午前早々家を出で金森通倫氏を訪ふ、不在。書生云ふ近所に行きしなれば直ちに歸宅せんと、吾はムツとせり、又た不在か。吾は直ちに、歸宅せんとせり、然れ

ども、一考したり、爰ぞ「社會」、爰ぞ「實際」と。直ちに路を轉じて德富猪一郎氏の病を見舞ふ。

再び金森氏を訪ふ、在宅！

（吾は謬れり、笑ふ可し。笑ふ可し、十四日……以下之れ十三日の事實なり、吾は已に忘却したるなり、十三日の記にはかゝる事を省畧し居るなり。抹殺せざるべし）

▽十四日又た金森氏を訪ふ、前日歸宅に際し約し置きたればなり、在宅。書生は吾を客室に導きぬ、室に入る。金森は机にかゝり新聞を讀み居たり、吾をして對坐せしむ、吾も亦た机に向て坐す。

默々たり、輕くあいさつを終つて後は、互に一語を吐かず、渠は新聞を讀み續く、吾も新聞を取りて讀む、默々たり。

不快！　不快と名づく可き一種の惡感情は吾を打てり。金森、自由新聞を吾に渡して云ふ、此の論說文を讀んで、斧正を試みよ、と。吾は「妙」に感じたり、さり乍ら新聞を受取りたり。讀み下したり。二三字を加へ、二三行を抹殺せり。突如として中心、さゝやいで云ふ、吾は「文章家」に非ずと、中止せり。金森に返して曰ふ、元より斧正の限りに非ず、と。金森は吾が試みたる二三の斧正を見たり、吾は金森の決して文章を作る人に非らざるを前以て聞き居たるなり。吾は心中不可言の感ありき。

兩々相對して默して語らず。金森云ふ、新聞を見られよ、吾は儀式的に三四の新聞をひるがへしたり。投げやりたり。突如として曰く、他の新聞を見て材料を取るが如きは他の新聞に劣る所以也と。金森は應へ云ふ、元よりなり、然かれどもかゝる事はなさず、只だ能く他の新聞を見ざる時は、他の說及び世の形勢を知り難しと、吾は心中冷笑をもらせり。

ア、此の人亦た遂に共に爲すに足らざる乎、去らん去らん。吾は心中、金森に向て云ふ。君、君の助手を得んと思はゞ他に求めよ、文章の器械を得んと思はゞ吾には少しく出來かぬるなりと、吾は云ひ放たんとせり。

金森は立ちて隣室に出たり、吾は決心する所ありたり。金森かへり來るや吾は直ちに渠に向て嚴然と問へり、君、「吾を用ゆる乎」と。

渠の顏色は極めて曖昧なりき、而も彼の言語は云ふ、君にして入社せんとならば、以上の條件を以せられよ、余は不同意なりと、卽ち吾をして文章家たらしむるなり。談話は始まりぬ、一歩より一歩、感情は解かれたり、吾は新聞に對し吾が思ふ所をありのまゝに語り出でぬ。吾の文章家以外の精神、思想は渠少しく了解したりしが如し。大に打ちとけて語り始めぬ。愈々入社に決したり、

共に大に「自由新聞」を新聞として發達せしめ、成長せしめんことを約しぬ。

談一轉して渠の宗教談となりたり、之れ吾が何故に君は宗教界を去りて政治界に入りしかの問を以て始まりぬ。渠は全然、政治家風となりぬ、渠は政治家的口調を以て宗教を談ぜり、渠は餘りに宗教を特別視せざるなり。基督教も佛教も神道も一視同等なりと言へり。

自らの天職は政治界に在りと信ずと言へり。

政治界には單騎獨行の覺悟なかる可からずと言へり。此の時渠は意氣昂然として語りぬ。大言に似たれども、己れ單騎獨行なる以上は、進んでは己れ獨り天下の大政を握る位の覺悟なかる可からずと言へり。渠は野心充滿す、渠の眼中今や恐らくは星亨なく板垣伯なく、河野なかる可し、吾は渠の意氣を愛すると共に、政治界未だ容易に新島先生の求め難きを嘆じたり。

吾今にして思ふ、渠は德の人に非ず、さりとて智の人にも非ず、渠は意氣の人なり、渠は卒直なり、渠は自由黨的也、自由黨は人を得たり、而して遂に人を得ず。○

茶菓出でぬ、談愈面白くなれり、然かれども吾卒然已に返る、獨語中心、曰く「寄生蟲！」寄生蟲たる勿れ！

▽凡て青年に限らず「社會生活」のたゞ中に立つ者、殆んど寄生蟲ならぬはなし、社會は特色異采を惡み、之れを食ひ去る、之に處する者何時の間にか寄生蟲となり了はる。

凡そ寄生蟲となると、全く社會と苦戰して斃るゝと、其の間には極めて大なる天地のあれども、世界滔々の人、十に八九は寄生蟲となり、まれには社會を憤慨して返て己を焦く者あり。

大悟徹底、能くかの天地に逍遙する者に至りては少なし、ア、吾果して彼の天地に逍遙し得べき乎、未だ容易に能はざるなり、而も猛省自誡、務め勉めて止まずんば豈に天眞と理想とを殺し、希望と平和とを失はんや、天眞、理想、希望、平和、吾れ之れに由て生き、吾れ之に由て樂しむ▽

海外月報の事を語り出づ、渠大に賛成し、色々考案を同ぐらす、兎も角も近日丁氏等と相集りて相談するに決す。明日より出社する事に極め歸宅したり。今井氏在り。

夜丁氏來る、「自由」の發行停止を報ず！　何等の不運！

十五日朝、丁氏より書來る、曰く金森より今日自由社に出席ありたき旨報じ來りたり、十時頃より同道す可しと。

十五日。十時。

初て吾れ自由社に出席す、元より停止中故社員の來り居

る可き筈なし。

* * * *

今は詳細に事實を記載せざる可し、只だ愈々海外評論を出す事に決す。其の爲め金森は吾に明日上野圖書館に行く可きを托す。

十六日。今朝今井氏來る、共に上野に行く。

* * * *

△社會は忍耐を要す。

△社會は已に吾を擒にしたる心地す。

△吾は眞面目に仕事を勉む可し、社會事務と雖も決して遊戯に非ず、社會の事務と雖も「時間」を費すなり。

△吾は昨日吾を嘲笑せり、然かれども嘲笑は健全の德に非ず、堅く希望に立つ人の爲さゞる所なるを知りたり。

△「時」は生命なりとの感情は吾より消え去りたり。「時」は最早吾に取りて智慧の支配に屬しぬ、天來のインスピレーションたりし時は經過し去りぬ、之を思ふ時は心靈の寒きを感じ、社會の魔力の戰慄すべきを知り、讀書の一時も廢す可からざるを悟るなり。

△人生、宇宙、人類、働、義務、存亡、自然、美、永遠の生命、是等は凡て吾が感情より消え去りて、新聞、雜誌、應接、金錢、……此等の者は稍々口頭に上り、多く智慧と感情を支配する樣になりぬ。

△社會の魔力若し吾を擒にし了はるを悟らば斷然、一卷を懷ろにして、七週日の旅行に上る可しと考へぬ。

△然かれども擒へられたる者は悟る事なし、アヽ悲しい哉。

* * * *

△吾の行爲、思想、感情は注意して研究せざる可からず、之れ一個のソールが其の特別なる傳記を作りつゝある者なればなり、汝は詩人のドラマを讀むか、小說を讀むか、傳記を讀むか、汝は汝のドラマ、汝自身の小說、汝自身の傳記を讀まざる乎。

汝若し心を平にし、情を高くし、眼を明らかにし、以て汝の日々の變化を研究せば、汝は大なる讀書を爲したる也。エマーソン曰く、渠は渠れ自らの思想には、不注意無頓着なり、何となれば渠れの思想なればなりと。

吾は人間なり。

此の人間が過去には、過去の教育、情實、境遇、經驗を有し、未來には未來の希望、境遇、情實、教育を有し、一轉、一化、一張一弛、一退一減、忽にして聖者となり、忽ちにして俗骨となる、其外部の事實、內部の事實、如何に大なる詩ぞ！

＊　＊　＊　＊

已に吾れ自由社に入る以上は、政黨員と知らざる可からず、紛々の輩と伴はざる可からず、吾れ人を化するか、人、吾を化するか、人は人、吾は吾乎。

三者必ず其の一たる可し、吾半ば人を化し、人半ば吾を化す、吾死したるなり。吾の人に全く同化せらるゝに至りては、之れ眞理の大罪人なり、之れ理想の大罪人なり。吾、人を化す乎、神の助けを求め、自信に由り、エマーソン、カーライル、ゲーテ、ウォールズウォルス、孔、王等の諸賢の助けに由り、斷乎、昂乎、堂々焉、正々焉、以て彼等を征服し盡す可きなり。討死す可きなり。

せめては、吾、吾の生命あらしめよ。

＊　＊　＊　＊

吾、事務、事業、政策の爲めに、策を立つる應に堂々、正々たる可し。

＊　＊　＊　＊

十七日。靜に机に對して書を繙かんとす。不思議なる哉、一種の壓力は何處よりか、侵し來りて吾を壓するが如し。吾が心落付く能はず、吾が情は悠靜なる能はず、曾て食を忘れて愛讀し、涙を呑んで默讀したる聖經も、只だ吾が眼前に其の文字を羅列するに止まり、冷やかなる意義は只だ吾が心の表面をかすりて空々の中に消去るなり。

ア、之れ何故ぞや、吾を壓する力ありとせば何者ぞや、吾は靜に考究せり。

蓋し吾が爲す可しとて約束を重ねたる社會の事務、吾が心に企て置ける計畫、一度び打たれたる社會生活の魔力。此等の者は吾が精神の上に懸りて容易に之れを掃ふ能はず、忘れしが如く、忘る能はざるが如く、掃ひしが如く、掃ふ能はざるが如く、吾を不安、不快の境に陷れ、猶苦るしき牢獄の中に在るの思あらしむるに至る。

王陽明、詩あり。久落二泥途一惹二世情一、柴扉丹壑是平生、と。ア、社會、々々、一に吾をして縹渺雲烟の中に迷はしむる哉。

十八日。筆頭第一に自誡す。

吾に自信あらば、吾に寛容の德、克己の堅志、冷靜なる意志、邁往勵行の氣なかる可からず。

此等の者なくして自信ありとなすは自ら欺く者也。自ら知らざる者也。吾は自然の兒なり。

吾に理想信仰あり。

吾に事業あり。

吾は一個、人間なり。

エメルソン其自信論の初めに一詩を引く、左の如し。

Man is his own star; and the soul that can
Render an honest and a perfect man.

Commands all light, all influence, all fate;
Nothing to him falls early or too late.

吾の自信は將に此の如くならざる可からず、故に若し、向後吾に怠惰の行あり、吾に寛容の德乏しく、吾に克己の念薄く、吾に冷靜の意志なく、事業に當り、目的に當り、事務に當りて勵行邁往の英氣を缺かば、之れ吾自ら吾の理想、信仰をなみしたるなり、吾は社會の倭兒となりたるなり、人間の靈を殺したる也、一言以て言へば自殺したるなり。

* * * *

電報來る。

自由社より、曰、「カイテイスグコイ」（解停直ぐ來い）

十九日。十七、十八忽ちに經過し、十九日も今は早や十時の深夜なり。いでや此三日間に於ける吾が生命の傳記を研究詳記し置かん。

十七日午前、讀書す。久しぶりにて讀書す、悲い哉書は我れに解せられず、時間のみ經過して何事も得る能はざりしこそ殘念なれ。エマーソンの「自信論」を少しく讀む、益する所ありたり。

午後小雨來る、雨を突て神田なる引頭百太氏を訪ふ、薄暮水谷氏來る、伴ふて無名亭と稱する寄席に至り、女義太夫を聽く。雨甚しきを以て引頭氏に宿す、引頭氏と痛談して夜の更くるを忘る。

十八日尙引頭氏に在り、水谷氏來る、今井氏、收二と共に來り快談す、正午今井氏、收二、三人伴ふて歸宅す。晝飯を了へ將に再び神田に行く、水谷、引頭兩氏等を助けて「青年文學」十六號校正を試みんとし、出でんとするに際して自由社金森氏より電信來り、自由解停に付て至急出社を促す、直ちに出社す。社員諸氏に紹介せらる。文章一篇を作り、別に丁氏を助く。夜歸路に就く、路に塚越芳太郎氏を訪ひ、快談數時にして歸る、歸れば將に十一時を過ぐ。

今朝今井氏來る、散步す、午後新聞を讀む。

記し來りて自ら其の表面的馬鹿げたる事實に驚く、ア、吾は實に明細に內なる吾の生命を記する能はざる也。

ア、可憐の壯漢何ぞ徒らに憂ひまどひて躊躇するぞ、何ぞ直截に爾の筆を振はざる。吾が吏心一つの極めて悲壯なる聲あり。曰く、爾は政治的になり了りし乎、と。

ア、吾誠に此の問を解する能はざる也、しかも何所よりか此の問は吾が心を打ち來るなり、政治的、々々々、此れ何の意ぞ、吾は明らかに政界に向て其の事業の生命を供へんとするの決心ならずや、果して然る乎、果して然る乎、然り々々元より然りと吾は斷言す可し（ア、果して然る乎、然る乎）然らば政治的となる元より可ならずや。斷じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook